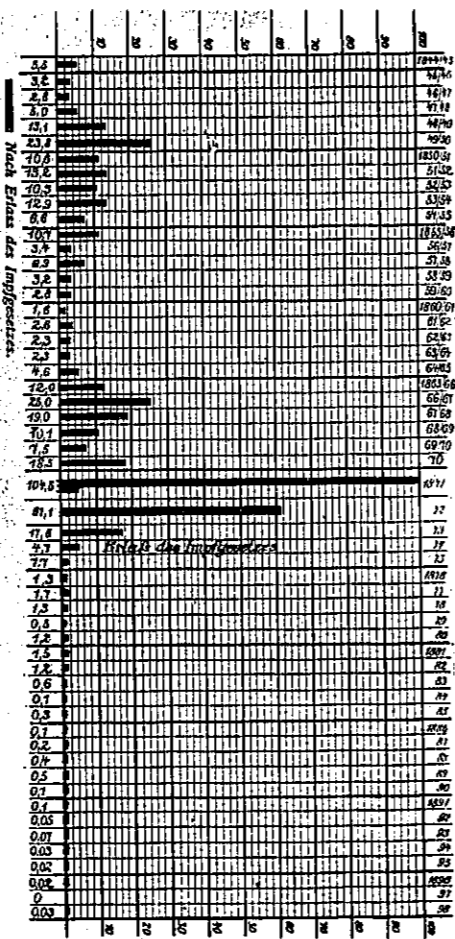


Pockensterblichkeit in Bayern und Belgien.  
 Von je 100000 Einwohnern starben an den Pocken:

Tafel III.

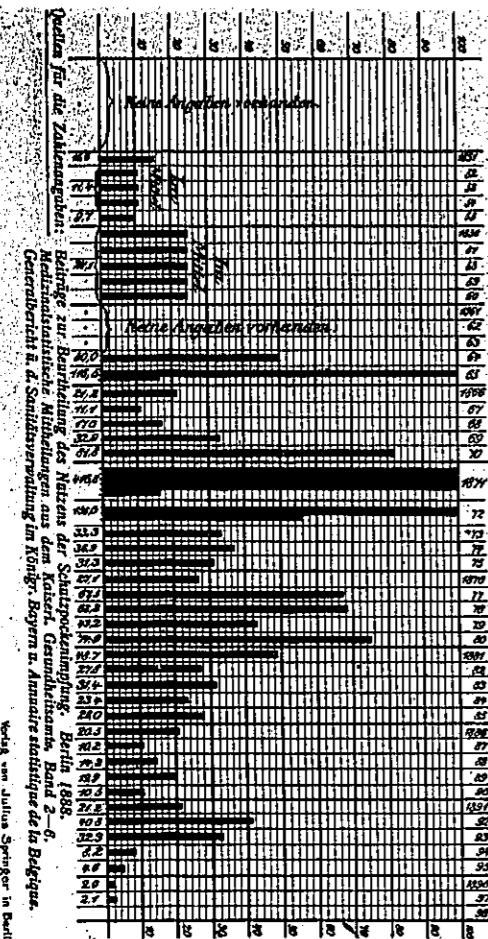
Bayern.

Vor 1874 einmalige Impfung, seit 1879 Impfung und Wiederimpfung gesetzlich durchgeföhrt.



Belgien.

Kein Impfung.

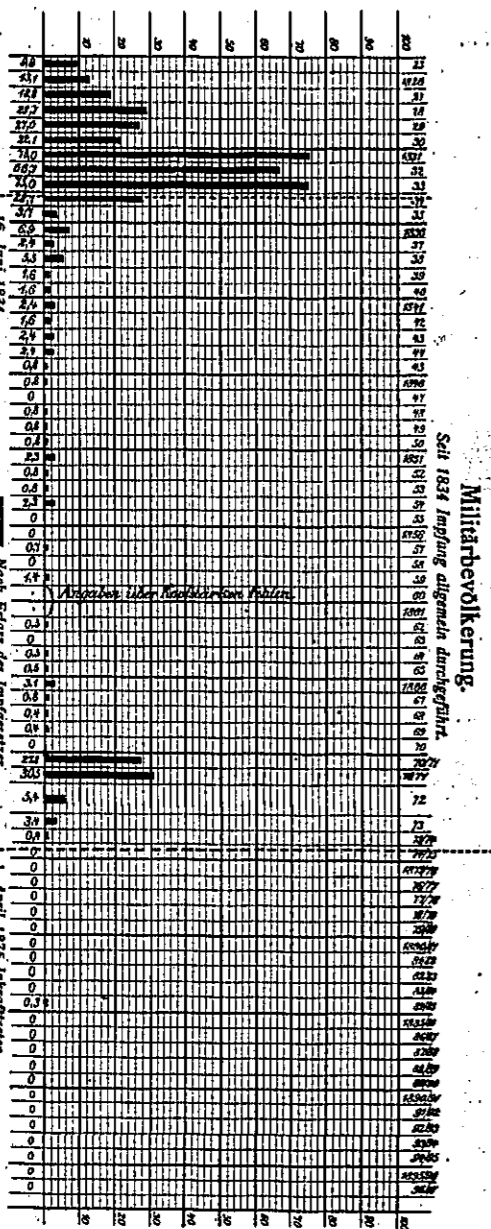
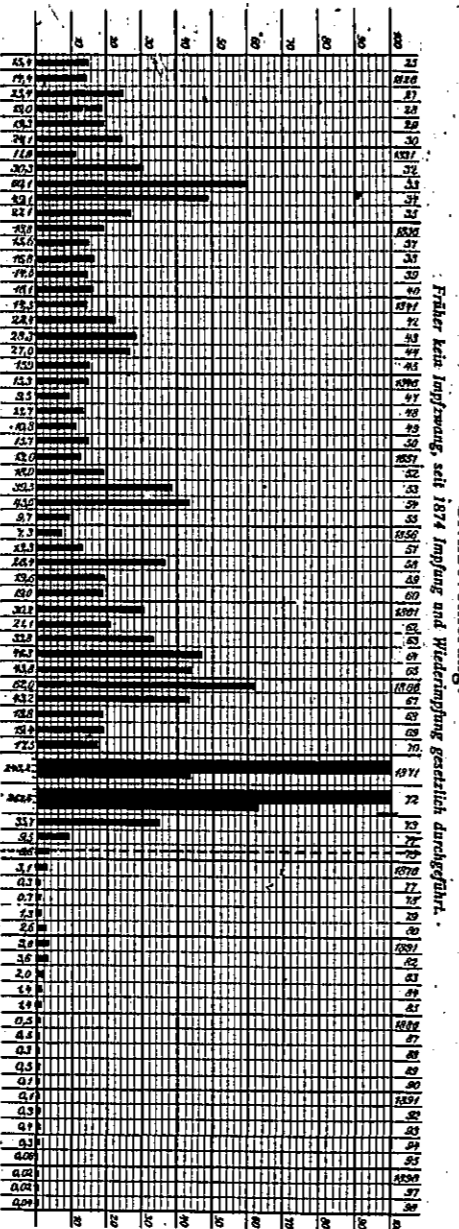


Verlag von Julius Springer in Berlin K.

# Pockensterblichkeit der Civil- und Militärbevölkerung in Preussen.

Von je 100000 Personen starben an den Pocken:

Tafel V.



Quellen für die Zahlenangaben: Beiträge zur Bearbeitung des Nutzens der Schutzpockenimpfung Berlin 1889, Preussische Statistik, Medicinalstatistische Mitteilungen aus dem Kaiserl. Gesundheitsamte, Band 3 und Sanitäts-Berichte über die königlich Preussische Armee.

## 第二 死亡率ヨリ觀タル種痘ノ效果

痘瘡患者ノ死亡率ニヨリテ種痘ノ効果ヲ判斷シタル材料ハ古來其ノ文献ニ乏シカラズ就中其ノ主ナルモノ數例ヲ擧グレバ左記ノ如クニシテ痘瘡豫防ニ對スル種痘ノ效果ノ確實ナルコトハ毫モ疑ヲ容レザル所ナリトス。

一、一八七〇乃至七一年ザクゼン王國ケムニツツ市ニ於ケル流行ニ際シプリンチエル氏ノ調査セル死亡  
率ハ左ノ如シ。

區	分	患者數	死亡者數	死亡率
未種痘者		二、六〇三	二四二	九・二
既種痘者		七六九	七	〇・九

二、一八七〇乃至七二年ライプチヒ市ニ於ケル流行ノ統計ニ依ル死亡率ハ次表ノ如シ。

區	分	患者數	死亡者數	死亡率
未種痘者		一、三九五	五〇八	三六・四一
既種痘者		二、三三〇	一九七	八・八三

三、一九〇五年獨逸ニ於ケル流行ニ際シブレীগエル President 氏ノ報告セル死亡率ヲ同國衛生局公報ヨリ摘  
録スレバ左ノ如シ。

區	分	患者數	死亡者數	死亡率
未種痘者		三三	五	一五・一五

區分	患者數	死亡者數	死亡率
潜伏期中ノ種痘者	三六	六	一六・六六
既種痘者初種	七一	八	一一・二八
既種痘者再種	五七	四	七・〇一
種痘關係不明者	一五	七	四六・六六
計	二二二	三〇	一四・一五

四明治四十年(一九〇八年)神戸市ニ於ケル流行ニ際シ天兒氏ノ調査セル死亡率ハ左ノ如シ。

區分	患者數	死亡者數	死亡率
未種痘者	二六七	一三四	五〇・〇一
既種痘者	二七四	一六	五・八三
潜伏期中ノ種痘者	二五	三	一二・〇〇
種痘關係不明者	三八	六	一三・〇六
天然痘經過者	四	〇	〇
計	六〇八	一五九	二二・一五

五、大正七年及九年(一九一八年及一九二〇年)東京市駒込病院ニ於ケル栗原野口兩氏ノ調査セル死亡率ノ統計ハ次ノ如シ。

區分	患者數	死亡者數	死亡率
未種痘者	四六	二六	五六・五
既種痘者	一二四	一二	九・七

以上ノ諸表ヲ通覽スルニ、何レモ未種痘者ト既種痘者トノ間ニハ患者數及死亡者數共ニ著シキ差異アリ、種痘ノ痘瘡豫防上ニ於ケル效果ノ顯著ナルコト何等議論ノ餘地ナキ所ナリトス。

### 第三 痘苗ノ種類

既ニ述ベタルガ如ク我國ニ於テ從來用ヒラレタル痘苗ノ種類及其ノ善感成績ハ左表ノ如シ。

年次	痘苗種類	種痘術式	初種善感百分比例	再三種善感百分比例	十五歳以上ノ善感百分比例
明治十九年	牛痘系	刺種式	八八・七	四二・九	〇
同二十年	牛痘系	刺種式	八八・四	三八・九	〇
同二十一年	牛痘系	刺種式	八八・二	三三・六	三三・〇
同二十二年	牛痘系	刺種式	八七・六	三三・八	三一・二
同二十三年	牛痘系	刺種式	八六・八	三二・一	三一・〇
同二十四年	牛痘系	刺種式	八七・一	三二・七	三三・四
同二十五年	牛痘系	刺種式	八〇・三	三三・五	三〇・六
同二十六年	牛痘系	刺種式	八一・四	三四・六	三〇・五
同二十七年	牛痘系	刺種式	七九・八	三一・二	二七・二
同二十八年	牛痘系	刺種式	八〇・二	三一・八	二九・〇
同二十九年	牛痘系	刺種式	七九・七	三〇・七	二七・六
同三十年	牛痘系	刺種式	七五・四	三二・八	三〇・二
同三十一年	牛痘系	刺種式	八〇・八	三三・六	二九・五
同三十二年	牛痘系	刺種式	八三・五	三二・四	二六・三

年	痘種	痘種	初種善感百分比	再三種善感百分比	十五歳以上善感百分比
明治三十三年	牛痘系	再種痘苗及純牛痘苗	八六・三	三二・一	二六・四
同 三十四年	牛痘系		八六・六	三二・五	二四・〇
同 三十五年	牛痘系		八八・三	三二・七	二三・七
同 三十六年	牛痘系		八七・三	三四・四	二四・四
同 三十七年	牛痘系		八七・二	三三・二	二四・四
同 三十八年	牛痘系		八五・四	三三・四	二六・八
同 三十九年	牛痘系		八六・七	三一・九	二二・八
同 四十年	牛痘系		八八・一	三〇・四	二三・八
同 四十一年	牛痘系		八二・九	三八・五	三六・〇
同 四十二年	牛痘系		八八・七	三一・六	
同 四十三年	牛痘系		八八・七	三一・六	
同 四十四年	牛痘系		九一・〇	三五・一	
大正元年	牛痘系		八九・三	三六・八	
同 二年	牛痘系		九〇・二	三九・八	
同 三年	牛痘系		九三・三	四八・七	
同 四年	牛痘系		九三・二	四八・九	
同 五年	牛痘系		九二・五	五二・五	
同 六年	牛痘系		九三・四	五九・〇	
同 七年	牛痘系		九〇・四	五七・九	
同 八年	牛痘系		九〇・九	五三・八	
同 九年	牛痘系		八七・九	五〇・四	

年	痘種	痘種	初種善感百分比	再三種善感百分比	十五歳以上善感百分比
同 十年	牛痘系		九三・〇	五五・四	
同 十一年	牛痘系		九四・五	六〇・〇	
同 十二年	牛痘系		九五・四	六二・三	
同 十三年	牛痘系		九五・二	六四・五	
同 十四年	牛痘系		九五・二	五九・〇	
昭和元年	牛痘系		九五・四	六二・三	
同 二年	牛痘系		九五・九	五六・九	
同 三年	牛痘系		?		

備考 本表ハ衛生局年報ニ依リ公、私合計ノ比例ヲ計上セリ、明治四十二年以降十五歳以上ノ善感比例ナキハ種痘法改正ノ結果ニ依ル、

以上ノ數字ヲ觀察スルニ、種痘ノ成績ニ依レバ前記各種ノ痘苗ニ就テハ其ノ種類ニ由リ成績ニ大ナル差異ヲ認メズ、然レドモ牛化人痘ト純牛痘トノ痘瘡防禦力ニ就テハ從來種々議論セラルル所ナリ、例之フオクトVose氏ハ新鮮ナル牛化人痘苗ハ永ク動物體ヲ以テ繼續セラレシ牛痘苗ヨリモ著シク強キ免疫ヲ與フルモノナリト唱へ、山本及小代兩氏ハ種痘免疫ノ程度及持續期間ハ痘苗ノ種類ニ密接ノ關係アルコトヲ述ベタリ。

氏等ハ牛化人痘苗及純牛痘苗ヲ以テ豫メ初種痘ヲ行ヒ、後是等二種ノ痘苗ヲ以テ再接種ヲ試ミ、其ノ結果ニ依リ種痘免疫ノ程度及持續期間ハ個性ニ依ルノ外、初種痘ニ用ヒタル痘苗ノ種類ニ依リ著シキ差異アルコトヲ論ゼリ。

予亦此關係ヲ知ラント欲シ、人痘毒及是等二種ノ痘苗ヲ用ヒ、猿ニ就テ其ノ交叉免疫試験ヲ企圖セリ。實驗ニ用キタル人痘苗ハ昭和三年四月東京市ニ於ケル痘瘡流行ニ際シ、患者ヨリ痘瘡組織ヲ採取シ、ダリセリシ乳劑トナセルモノニシテ、第二編第四章ニ於ケル實驗ニ用キタルモノト同一種類ノモノナリ、牛化

人痘苗ハ傳染病研究所製品ニシテ人痘毒ヨリ家兎次デ牛ヲ通過スルコト合計七回ニ及ビタルモノ、純牛痘苗ハ北里研究所製品ニシテ、明治三十九年朝鮮ニ於テ發見セル特發牛痘ヲ原苗トシ、爾來牛體ヲ通過スルコト百二十七代ニ及ベルモノナリ、猿ハ和猿ノ若キモノヲ用キ、腹部ニ於テ剃毛シ消毒ノ後切種式ニ依リ上記三種ノ痘毒ヲ次表ノ順序ニ從ヒ接種シ、其ノ發痘狀況ヲ觀察セリ。

實驗 第一 始メ人痘、後ニ牛痘ヲ接種セルモノ

猿第八號

痘苗/日次	人痘	牛化人痘	純牛痘
第一日	+		
第二日			
第三日			
第四日			
第五日	±		
第六日			
第七日			
第八日			
第九日			

猿第十五號

痘苗/日次	人痘	牛化人痘	純牛痘
第一日	+		
第二日			
第三日			
第四日	+	+	+
第五日	+	+	+
第六日	±	+	+
第七日			
第八日	±	+	+
第九日	-	-	±

猿第九號

痘苗/日次	人痘	牛化人痘	純牛痘
第一日	+		
第二日			
第三日			
第四日	+		
第五日	+		
第六日			
第七日	±	+	+
第八日	-	+	+
第九日			

猿第十號

痘苗/日次	人痘	牛化人痘	純牛痘
第一日	+		
第二日			
第三日			
第四日	+	+	+
第五日	+	+	+
第六日	±	±	±
第七日	-	-	-
第八日	-	-	-
第九日	-	-	-

猿第十一號

第二 始メ牛化人痘、後ニ人痘及純牛痘ヲ接種セルモノ

痘苗/日次	人痘	牛化人痘	純牛痘
第一日		+	
第二日			
第三日			
第四日	±	+	+
第五日	±	+	+
第六日	-	+	+
第七日	-	+	+
第八日	-	±	+
第九日	-	-	+

猿第十二號

第三 始メ純牛痘後二人痘及牛化人痘ヲ接種セルモノ

痘苗	日次								
	第一日	第二日	第三日	第四日	第五日	第六日	第七日	第八日	第九日
人痘				±	-	-	-	-	
牛化人痘				+	+	+	±	±	
純牛痘	+				+	+	+	+	

猿第十六號

第四 純牛痘ノミヲ接種セルモノ

日次		第一日	第二日	第三日	第四日	第五日	第六日	第七日	第八日	第九日	第十日	第十一日	第十二日	第十三日
備考	痘苗	+		+	+	+	+	+		+	+	+	+	±

備考  
 一、符合ハ各欄ノ日次ニ接種シタルモノノ發痘狀況ヲ示スモノニシテ、+ハ膿疱ヲ形成セルモノ、±ハ丘疹又ハ紅暈等ノ反應ヲ呈セルモノ、-ハ全ク陰性ニ終リシモノナリ。  
 二、實驗第一ニ舉ケタル猿四頭ハ何レモ人痘ニ良ク感染シ、第十日目前後ニ於テ全身發疹ヲ生ゼリ、實驗第二、第三、第四ノ猿ニ於テ第一日ニ接種セル牛痘ハ何レモ定型的痘疹ヲ作レリ、而シテ第二、第三ニ在リテハ後、人痘ヲ接種セシモ、全身性發疹ヲ生ゼザリキ。

以上四種ノ實驗成績ヲ通覽スレバ

一、猿二人痘接種後

(A) 人痘ヲ第四日目ヨリ連日接種スレバ第五乃至第六日以降ニ接種セシモノハ既ニ膿疱ヲ生ゼズシテ單ニ丘疹又ハ紅暈ヲ形成スルニ止マリ、第七乃至第九日以降ニ於テ接種セルモノハ最早何等ノ反應ヲモ呈セズ。

(B) 牛痘ヲ第四日目ヨリ連日接種スレバ牛化人痘ニ於テハ第五乃至第八日接種ノモノニ至ル迄膿疱ヲ形成シ、純牛痘ニ於テハ更ニ第九日接種ノモノニ至ル迄膿疱ヲ形成セリ。

(C) 要之、人痘毒ヲ以テ前處置セラレタル猿ハ其ノ免疫性發生ノ初期ニ於テハ人痘毒ニ對スル免疫性ト、牛痘毒ニ對スル免疫性トノ間ニ明カニ差異アルコトヲ示セリ。

二、猿ニ牛痘接種後

(A) 人痘ヲ接種スレバ既ニ第四日接種ノモノニアリテモ膿疱ヲ形成セズ、第六日以降ノモノハ全ク陰性ニ終レリ。

(B) 牛痘ヲ以テスレバ實驗第一ノ如ク第六乃至第九日接種ノモノニ至ル迄膿疱ヲ形成ス、然レドモ此際牛化人痘ト純牛痘トノ間ニ著シキ差異アリ、牛化人痘ニ於テハ始メ接種シタル痘毒ガ牛化人痘タルト純牛痘タルトニ拘ラズ、第六乃至第七日後ノ接種ニ至ル迄膿疱ヲ作りシノミナルモ純牛痘ニ於テハ第八乃至第九日接種ノモノニ至ル迄明カナル膿疱ヲ形成シ、之ヲ牛化人痘ノ場合ニ比スルニ此間約二日ノ差ヲ生ゼリ。

(C) 要之、牛痘毒ヲ以テ猿ヲ免疫スレバ其ノ免疫發生ノ狀況ハ人痘毒ヲ以テセル場合ト稍々異リ、人痘毒ニ對シテハ約二日間早ク其ノ發痘ヲ妨止シ得ルニ反シ、牛痘毒ニ對スル關係ハ殆ド同様ニシテ、初接種後十日以後ニアラザレバ尙膿疱形成ヲ阻止シ得ル程度ニ至ラザルコトヲ示セリ、而シテ純牛痘ガ何レノ場合ニモ牛化人痘ニ比シ免疫ノ影響ヲ受クルコトノ遲延セルハ共通ノ所見ナリトス。

三、實驗第四ハ前記各實驗ニ於テ常ニ純牛痘ガ免疫發生ノ影響ヲ受クルコトノ遲延セルガ如キ事實ハ、果シテ純牛痘ノミヲ以テシテモ尙見ラルル所見ナリヤ否ヲ知ラントシテ行ヘルモノナリ、其ノ成績ハ依然トシテ初接種後第十一日ノ接種ニ在リテモ尙膿疱ヲ形成シ、純牛痘毒ノ免疫能力ノミヲ以テシテハ說明シ得ザル現象ヲ呈セリ。

〔實驗成績ノ綜括〕

以上ハ何レモ免疫發生ノ初期ニ於ケル状態ニシテ之ヲ以テ未ダ牛化人痘苗ト純牛痘苗トノ免疫的効果ヲ斷定スル能ハズト雖、人痘毒ニ對スル免疫關係ニ於テハ兩者ノ間ニ每常著シキ差異ヲ示スモノニアラズ、牛痘毒相互間ニ於テモ免疫關係ハ殆ド同様ナリ、唯純牛痘ニ於テハ免疫現象ト一致セザル發疹ヲ呈セシモ、是レ或ハ猿ニ於ケル特異反應ナルヤ亦知ル可カラズ、加フルニ人痘毒及牛痘毒ノ猿ト人トニ對スル關係一様ナラザルヲ以テ、依然牛化人痘苗ニ比シ免疫ノ發生状態ニ併行セザル反應アルモノヲ見タリ、人ニ於テモ兩牛痘苗ハ果シテ是等動物試驗ノ成績ニ一致スル反應及免疫關係ヲ示スヤ否、前記山本、小代兩氏ノ人ニ於ケル免疫發生初期ノ實驗ニテハ、純牛痘苗ノ常ニ優レルコトヲ示セリ、其ノ理由ニ就テ、氏等ハ單ニ毒力ノ差ニ依ルモノト考フレドモ、予ハ其ノ他ニ尙痘毒ノ性質ニ依ル影響ナキヤ、今後ノ研究ニ俟タザルベカラズト信ズ。

第四 死滅痘苗

最近ノ研究ニ依レバ痘瘡ノ免疫及免疫抗體ノ發生ニハ必シモ外見上認メ得ベキ皮膚反應、例之膿疱形成ノ如キモノヲ必要トセザルコト明カトナリ、殊ニゾーベルンハイム Sobanheim 氏一派ノ研究ニ依レバ、抗體ノ形成ハ死滅病原體ヲ以テシテモ確實ニ認メ得ラルル所ナルヲ以テ、免疫ノ發生ニ關スル生活病原體ノ

意義ハ如何ナル程度ニ於テ之ヲ認ムベキモノナルカハ興味アル問題ナリ、此點ニ關シ從來行ハレタル實驗ハ決シテ少シトセズ、或ハ死滅病原體ヲ用ヒ、或ハ生活病原體ヲ除去セル特異可溶性物質ヲ以テ行ヒタル實驗アルモ、其ノ結果ハ實驗者ニ依リテ必シモ一定セズ、例之加熱痘苗モ輕微ナガラ明カニ免疫力ヲ發生セシメ得ルモノナルヲ認ムル學者ニハ、ヤンソン Janson、クネッペル マッセル Knoepfelmacher、アンスバール Henseval、クラウス及フォルク Kraus u. Volk、シムン、シッフェ村田、ハルトン Gordon、ペーリン Peim 氏等アリ、然レドモ加熱ハ痘苗ノ免疫元性ヲ著シク破壊スルモノナルコトハ上記ノ諸家亦大多數ニ於テ之ヲ證明セル所ナリ、又プロワチエツクイ Prowazek 氏ノ如キハ加熱ニ代フルニ家兎膽汁ヲ加ヘタル痘苗ハ病原性ヲ失フト雖、免疫ヲ獲得セシムト報ジ、ギンズ Gins 氏亦死滅病毒ガ多少ノ免疫ヲ與フルモノナルヲ主張セリ、反之死滅痘苗ノ全然無効ナルヲ唱フル人亦尠カラズ、例之アルント Arndt、ガスタネル Gastinel、トマルキン及スワレー Tomarkin u. Suarez、グロート Groth 氏等ノ如シアルント氏ノ如キハ家兎膽汁ヲ加ヘタル痘苗モ全く免疫力ナシト云ヘリ、然レドモ死滅痘苗モ之ヲ大量ニ接種スル場合ニハ多少ノ免疫ヲ發生セシメ得ルモノナルハ多クノ學者ノ認ムル所ナルヲ以テ、死滅痘苗ハ免疫元性アルモ、動物體內ニ於テ増殖セザル爲メニ免疫發現極メテ微弱ナリト雖之ヲ大量ニ用フルトキ、始メテ生活病原體ヲ用キタル際ニ於ケルガ如キ成績ヲ觀ルニアラズヤトノ疑問ヲ生ズ、村田氏ノ實驗ニ依レバ、長時日ノ貯藏後、無力トナル「グリセリン」中ト加熱ニ依リ無力トナシタル痘苗トニ就キ其ノ免疫力ヲ比較スルニ、前者ハ遙ニ後者ニ勝リタリト。「コロヂウム」或ハ「セルローゼ」膜ノ如キニ痘苗ヲ入レ、之ヲ動物體內ニ挿入シ、免疫ノ發生ヲ認メタルモノニ、ドゥモール及ズググ de Wacle u. Suggs、シムン、シッフェ、テイシエン、ゾー、ボア、ー、及ガスタネル Teissier, Duvoyr u. Gastinel 氏等アリ、又最近中川氏ハ痘苗ヨリ煮沸免疫元ヲ製シ、家兎靜脈内及舉丸内若ハ皮下注射ニ依リ免疫及抗體發生ヲ認メ、又家兎ニ於テ之ヲ反復點眼シ免疫ノ發生ヲ證明セリト。



死滅痘苗ガ「アレルゲン」トシテ作用シ得ルモノナルハ、既ニ「ピルケイ」Pringet氏ノ唱フル所ニシテ、アイン  
 シーデルV. Einsiedel氏ノ如キモ死滅膿疱滲出液ヲ以テ高度ノ異常反應ヲ惹起セシメ得ルノミナラズ、家兎  
 ニ於テハ之ニ依リ免疫ヲ獲得セシメ得ト云ヒ、ルリーLury氏亦死滅痘苗ヲ角膜ニ反復接種シテ免疫ヲ獲  
 得セシメ得ザリシモ、能ク異常反應ヲ認メタリト報ゼリ。

予等ハ後章述ブルガ如ク昭和四年一二月ノ交、東京看護婦學校生徒ニ對シ六十度三十分、八十度三十分及  
 百度三十分ニ加熱シタル痘苗ヲ普通痘苗ト對照シテ同一人ニ接種シタルニ、加熱痘苗ノ呈シタル異常反  
 應ハ普通痘苗ニ比較シテ同一程度若ハ夫レ以上著明ニ現ハレタル場合尠カラザルヲ經驗シタル點ヨリ  
 考察シ、死滅痘苗ハ普通ノ接種方法ニ據ルモ尙著明ナル「アレルゲン」タルコトヲ確認セリ、依之死滅痘苗ニ  
 モ其ノ抗原性ノ一部ハ殆ド何等ノ變化ナクシテ保有セラレツツアルコトハ疑ヲ容レザル處ナリトス。  
 然ラバ再種痘者ニ於テ種痘ガ全然不善感ニ終リタル場合、換言スレバ接種セラレタル痘毒ガ増殖スルコ  
 トナク、速ニ滅殺セラレタル場合ニ於テモ、其ノ免疫元性物質ハ前記加熱痘苗ヲ以テセル場合ノ如ク尙免  
 疫性ヲ補強スルノ作用アリヤ否、甚ダ興味アル問題ナリトス、既ニ「ゾーベル」Zöbel、佐藤氏一派ニ依リ再  
 種痘不善感ナル場合ニ於テモ、血中ニ著明ナル抗体ノ増生ヲ來スコトヲ詳ニセラレ、重田氏ニヨリ免疫血  
 清ヲ以テ滅殺セル痘苗ヲ接種スルモ、生痘苗ト同様ナル免疫ヲ生ゼシメ得ルコト明カトナリ、今ヤ從來考  
 ヘシ如ク不善感再種痘ノ全然無効ナルモノニ非ザルコトハ一般ニ認メラルルニ至レリ、然レドモ單ニ斯  
 ル免疫反應ヲ演ジタルコトニ依リテ同時ニ細胞夫レ自身ノ免疫性亦増強スルモノナリヤ、此點ニ關シテ  
 ハ其ノ經驗的事實モ實驗的研究モ共ニ尙信賴ス可キ說明ヲ與フルモノナシ。

惟フニ種痘免疫ハ牛痘病原體ノ有スル免疫元性物質ニ由リテ起ル純然タル特异性免疫ナルコト明カニ  
 シテ、組織ノ不感受性ニ始マリ、次デ血中ニ抗体ヲ産出スルニ至ルモノナルコト既ニ述ベタルガ如シ、免疫

發生後血中ニ抗体ヲ證明シ得ル期間内ニ於テ、外來ノ痘毒ニ對シ防衛作用ヲ營ムニハ、此抗体ガ重要ナル  
 任務ヲ演ズルコト何人モ首肯スル所ナルモ、抗体消失後ニ於テ組織ハ尙依然トシテ免疫性ヲ有スルノ事  
 實ニ對シテハ從來只、如斯組織ハ痘毒ニ遇テ急ニ防衛機能ヲ營ム性質ヲ保有スルモノナリト考フルノ外  
 ナカリキ、然ルニ前記ノ如ク、如斯場合モ血中ニ抗体ヲ生ズルコト明カトナリ、殊ニ重田氏ハ動物試驗ニ於  
 テ再種痘ガ不善感ニ終リタル場合ノ抗体產生時日ハ善感セシ場合ニ比シ甚迅速ナルコトヲ認メ、種痘免  
 疫ハ固ヨリ細胞ノ機能ヲ主トスルモ、防衛機轉ノ主體ハ常ニ遊離抗体ニシテ、免疫セル組織トハ痘毒ノ侵  
 襲ニ遇ヒ急ニ抗体ヲ產生スル機能ヲ有スルニ過ギズトナセリ、サレバ痘毒ノ侵襲ニ遇テ組織ヨリ抗体ヲ  
 產生スルヤ否ヲ以テ種痘ノ善感不善感ヲ區別スルコト能ハズ、加之此ノ抗体ガ顯著ナル痘毒滅殺力ヲ有  
 スル點ヨリ觀テ、斯ル物質ヲ體內ニ發現セシムル作用ハ、縱令痘疱ヲ形成セザルモ種痘ノ目的ニ對シ無効  
 ナラザルコト最早之ヲ論ズルノ餘地ナカラシム、此際特異的ニ作用セシ免疫元性物質ノ量ハ果シテ組織  
 ノ免疫性ヲモ増進セシメ得タリシヤ否ヤ大ニ研究ヲ要スル點ナリトス。

爾テ考フレバ種痘免疫ノ強度ハ接種乃至發痘ノ量ニ比例シ、加熱或ハ血清加死滅痘苗ヲ以テ免疫センニ  
 ハ生痘苗ニ比シ頗ル大量ヲ要スルコト既ニ記セルガ如シ、故ニ單ニ量ノ點ヨリ考フレバ、不善感再種痘者  
 ノ場合ニハ、極メテ少量ノ免疫元ニテモ尙有效ニ作用ストノ確證ヲ得ザレバ、依之細胞ノ機能ヲモ補強セ  
 リト云フ可カラズ、然ラザレバ單ニ既存免疫力ノ試練ト考ヘラル可キ事項ガ此際免疫元性物質ノ大量注  
 入ト同様ナル作用ヲ爲スモノトナサザル可カラズ、換言スレバ種痘免疫ハ痘毒固有ノ免疫元性物質ニ依  
 リテ成立スル外、一度獲得セル免疫性ハ之ヲ時々免疫元性物質ニ遭遇セシメルコトニ由リ、之ヲ維持増進  
 スルノ作用アリト云ハザル可カラズ、不善感再種痘ガ血中ニ抗体ノ増量ヲ來シ、同時ニ組織ノ免疫性ヲモ  
 増進セシムルノ作用アリヤ否ハ、要スルニ此間ノ消息明カトナレル後ニ解決セラル可キモノナリ、本問題

ノ解決ニハ少ク下モ數年ニ涉リ多數ノ觀察ヲ必要トシ痘瘡豫防上頗ル須要ナル事項ナリト信ズ。

### 第五 種痘痕數ト發病、病型、死亡率、善感率トノ關係

#### 一 種痘痕數ト發病トノ關係

大正七年福岡縣某炭坑ニ於テ痘瘡ノ流行セル際太田包美氏ハ種痘痕數ト種痘後發病迄ノ經過年數トノ關係ヲ調査シ痘痕一顆ヲ有スルモノハ非常ニ多ク發病シ四顆以上ノ痘痕ヲ有スルモノニハ發病セ  
ルモノモ少ク又種痘後十年以内ニ發病セルモノナキ事實ニ依リ種痘ニハ四顆以上ノ痘痕ヲ貽スベキ  
様努ムルノ要アル旨ヲ主張セリ。

種痘痕數	種痘後發病迄ノ經過年數					計
	一箇年以内	一箇年以上十箇年以内	十箇年以上	計	計	
一	三	九	八	二〇	三	
二	三	一	四	七	二	
三	三	一	三	七	一	
四	一	一	二	四	一	
五	一	一	一	三	一	
計	六	一三	一八	三七		

#### 二 種痘痕數ト病型トノ關係

##### (1) 大連療病院ニ於ケル豐田氏ノ經驗

豐田氏が大正九年十月ヨリ十年九月迄大連療病院ニ收容シタル患者五百十六名中痘痕數ノ判然セ  
ルモノ二百十例ニ就キ痘瘡ノ病型ト痘痕數トノ關係ヲ調査シタル成績ハ次ノ如クニシテ是亦痘痕  
數ノ多キモノハ概シテ病症輕キヲ知り得ベシ但シ出血性痘瘡ニ限リテハ種痘ノ效果ヲ認メ難キガ

如シ。

種痘痕數	種痘後發病迄ノ經過年數		出血性痘瘡
	一箇年以内	一箇年以上十箇年以内	
一	三	九	一四
二	三	一	一八
三	三	一	二〇
四	一	一	二二
五	一	一	二六
計	五・八	一三	三七

##### (2) 同療院ニ於ケル星崎森脇兩氏ノ經驗

星崎森脇兩氏が大正十四年及十五年ノ二年間ニ大連療病院ニ收容セル痘瘡患者三百三十七例ニ就  
キ種痘痕數ト病型トノ關係ヲ調査シタルモノヲ見ルニ次ノ如クニシテ前記豐田氏ノ調査ト酷似ス  
ル所アルヲ知り得ベシ。

種痘痕數	種痘後發病迄ノ經過年數		出血性痘瘡
	一箇年以内	一箇年以上十箇年以内	
一	三	九	一四
二	三	一	一八
三	三	一	二〇
四	一	一	二二
五	一	一	二六
計	一三	一三	三七

#### 三種痘痕數ト死亡率トノ關係

(1) ロンドン市痘瘡病院タルストックウエル病院並ニ英國醫師マルソン氏ガ調査セル種痘痕數ト死  
亡率トノ關係ヲ見ルニ痘痕數ノ多キ程死亡率ハ低下シ殊ニ四顆以上ノ痘痕ヲ有スルモノハ罹患ス

ルモ死亡スルコトハ甚ダ稀ナリト云フ、今其ノ成績ヲ表記スレバ左ノ如シ。

種痘痕別	ストツクサエル病院		マールソン氏調査	
	患者數	死亡率	患者數	死亡率
種痘痕ナキモノ	七〇三	四七・五	三〇七	二五・一
不良ナル種痘痕一個有スルモノ	五一六	二五・〇	一、三五七	八・二
良ナル種痘痕一個以上有スルモノ	六三二	五・三	八八八	五・九
良ナル種痘痕二個以上有スルモノ	六七七	四・一	二七四	三・七
良ナル種痘痕三個以上有スルモノ	三〇一	二・三	一〇	一・一
良ナル種痘痕四個以上有スルモノ	二五九	一・一	二六八	一・一

(2) 又マツコンゴ―Mac. Combie氏ガ一萬一千七百二十四名ノ既種痘患者ノ痘痕數及其ノ深サニ就キ、死亡率トノ關係ヲ調査セルモノヲ記載スレバ次表ノ如シ。

薄キ痘痕一ノモノ	一六・七	鮮明ナル痘痕一ノモノ	六・四
薄キ痘痕二ノモノ	一一・二	鮮明ナル痘痕二ノモノ	三・七
薄キ痘痕三ノモノ	七・四	鮮明ナル痘痕三ノモノ	二・七
薄キ痘痕四ノモノ	四・八	鮮明ナル痘痕四ノモノ	二・七

四種痘痕數ト次回種痘善感率トノ關係

(1) 多數ノ醫師ニ依リ行ハレタル種痘ヲ檢診シテ得タル成績

昭和三年三、四月予ハ飯田防疫醫ト共ニ東京市ノ内外數十箇町村ニ亘リ、一歳ヨリ八十三歳迄ノ男女性ニ就キ、各町會ニ於テ施行セル種痘ニ對シ、種痘後第六乃至第八日ニ於テ巡回檢診ヲ爲シテ得タル「既往種痘痕數ト再種痘善感率トノ關係」ヲ觀ルニ、檢診總數千百十四名中善感者四百九十九名ニシテ、

其ノ痘痕總數ハ二千百五顆、一人平均四・二顆ニ對シ、不善感者六百十五名此種痘痕總數三千百八十顆ニシテ、一人平均五・二顆ナリ、即チ不善感者ニアリテハ善感者ヨリモ平均一顆宛多クノ種痘痕ヲ有スルヲ實驗セリ。

(2) 予等ノ種痘シテ得タル成績

昭和三年五、六月ノ交、予ト飯田防疫醫ガ警視廳管内ニ於テ三歳乃至六歳ノ小兒、七歳乃至九歳ノ小學兒童ニ對シ自ラ種痘シテ得タル成績ヲ表トシテ掲グレバ左ノ如シ。

年齢	種痘要	痘痕數有スルモノ						計
		痘痕一ノモノ	痘痕二ノモノ	痘痕三ノモノ	痘痕四ノモノ	痘痕五ノモノ	痘痕六ノモノ	
三歳	接種人員 不感人員 善感人員 接種人員百分比	六 四 二 三三・三三	二 一 四 三三・三三	一 二 一 三〇・五八	六 六 二 二二・二一	九 〇 一 一七・七八	二 二 一 二二・七三	三二六 二四五 八一 二四八五
四歳	接種人員 不感人員 善感人員	一七 一〇 一 五八・八二	三三 一八 一 四五・四五	六〇 三二 二 四六・六七	六 四 三 四五・三一	八 五 三 三五・二九	二 八 二 三五・〇〇	三三九 一九九 一四〇 四一・三〇
五歳	接種人員 不感人員 善感人員	一二 三 一 七五・〇〇	二七 八 一 七〇・三七	二九 一 一 五五・一七	六 八 三 四八・五三	七 三 二 六一・六四	七 四 三 五八・一一	二八三 一六五 一八 五八・三〇
六歳	接種人員 不感人員 善感人員	二〇 二 一 九〇・〇〇	三七 五 三 八六・四九	四八 一 一 七七・〇八	五七 一 一 七一・九三	五九 一 一 七二・八八	七 九 二 七〇・八九	三〇〇 七三 二二七 七五・六七

年齢	病 要		痘痕一類チ有ス ルモノ	痘痕二類チ有ス ルモノ	痘痕三類チ有ス ルモノ	痘痕四類チ有ス ルモノ	痘痕五類チ有ス ルモノ	痘痕六類チ有ス ルモノ	計
	接 種 人 員	不 善 感 人 員							
七歳	接 種 人 員	不 善 感 人 員	四七	六一・八六	二五八	二五五	三〇七	二五五	一、二四八
七歳	接 種 人 員	不 善 感 人 員	六	七三	一四〇	一三八	一七三	一二三	六三五
九歳	接 種 人 員	不 善 感 人 員	四一	六〇	九九	四五一	二五〇	一六	九一七
九歳	接 種 人 員	不 善 感 人 員	八七・二	九二・三	九〇・〇	八三・四	八一・二	六六・七	八三・七
計	接 種 人 員	不 善 感 人 員	七〇九・一	六一・八六	二五八	二五五	三〇七	二五五	一、二四八

即チ三歳ヨリ六歳ニ至ル兒童ニ就キ痘痕數ト今回行ヘル種痘ノ善感トノ關係ヲ觀察スルニ各年齢ニ在リテモ多少ノ動搖ハ免レザルモ大體ニ於テ善感率ハ痘痕數ト逆比例スト云ヒ得ベク特ニ痘痕一類ヲ有スルモノト二類或ハ夫レ以上ヲ有スルモノトノ間ニ善感率ノ甚シク差異アルヲ認メタリ次ニ七歳ヨリ九歳迄ノ學兒ニ就キ行ヒタル實驗ハ第一期痘痕數二類ヲ有スルモノノ善感率最モ高ク次位ハ三類第三位一類以下四類五類六類ヲ有スルモノノ順位ニ在リ即チ大體ニ於テハ前者ト同様痘痕數少キモノ程其ノ善感率高キヲ示セリ。

(3) 山本氏ノ報告

山本氏ハ初種痘痕一乃至二類ノモノハ再種痘ニ際シ八五・七%善感シ三類ノモノハ四五・四%四類ノモノハ三七・三%五乃至六類ノモノハ三二・五%善感スト云ヘリ。

(4) バイパー Peiper 氏ノ報告

初種痘時二乃至四類善感セバ第二期再種痘時五五・五乃至六六・五%善感シ初種痘時一〇乃至一四類

善感セバ再種痘時〇乃至三六・八%ノ善感率ヲ示スト報告セリ。

五 結 論

種痘痕數多キ程免疫力高キコトハ罹病關係並ニ再種痘關係ヨリ觀ルモ容易ニ首肯シ得ラルル處ナリトス而シテ罹病關係ヨリ考察スルトキハ四類以上ノ痘痕ヲ有スルモノハ種痘ヨリ發病迄ノ經過年數永ク且死亡率極メテ少キニ依リ種痘ニハ四箇以上ノ接種ヲ必要トスベシ而シテ四類ノ發痘ヲ得ントスルニハ初種痘ニアリテハ四箇再種痘ニアリテハ六箇ノ接種ヲ必要トス。

第六 第一期種痘後ノ經過年數ト再種痘善感率トノ關係

第一期種痘善感後幾年ニシテ免疫ヲ喪失スルカノ問題ハ防疫上重要ナル研究事項ニシテ之ヲ決定スルニハ第一期種痘善感後幾年ニシテ痘瘡ニ罹病セルモノアリヤト云フコトト第一期種痘善感後幾年ニシテ再種痘ニ善感スルヤノ點ヲ決定スルノ要アリ今茲ニハ後者ニ關スル文献ト予等ノ實驗トヲ記載セントス。

一 小代基雄氏ノ報告

大正十年六月小代氏ガ第一期種痘善感後再種痘ヲ行ヒタル成績ヲ發表シタルモノ次ノ如シ。

第一期種痘善感後ノ年數	接 種 人 員	善 感 人 員	善 感 百 分 比
一 年	ケ	一〇	一〇〇
二 年	ケ	七	一〇〇
三 年	ケ	二五	一〇〇
四 年	ケ	一〇	一〇〇
五 年	ケ	八三	一〇〇

第一期種痘善感後ノ年數	接種人員	善感人員	不感人員	善感人員	善感百分比
六ヶ年	一一二	一〇二	一〇二	一一二	九二・〇%
七ヶ年	一〇四	九二	九二	一〇四	八九・〇%
八ヶ年	九三	七九	七九	九三	八五・〇%

二、小山田氏ノ實驗

小山田氏ガ昭和三年大阪市桃山病院ニ於テ行ヒシ再種痘善感成績ハ本編第三章第一節(乙)ニ其ノ概要ヲ記載シタルガ、尙接種人員、善感人員等ヲ詳記スレバ次表ノ如シ。

第一期種痘後再種痘マテノ經過年數	種痘人員	善感人員	不感人員	善感率%
一箇年以内ニ種痘シタルモノ	三〇	一一	一八	四〇・〇
二箇年以内ニ種痘シタルモノ	三五	一七	一八	四八・五
三箇年以内ニ種痘シタルモノ	四六	二七	一九	七五・〇
四箇年以内ニ種痘シタルモノ	二四	一〇	一四	八三・三
五箇年以内ニ種痘シタルモノ	一五	〇	一五	七五・〇
六箇年以内ニ種痘シタルモノ	一八	〇	一八	六六・〇
七箇年以内ニ種痘シタルモノ	三	〇	三	一〇〇・〇
八箇年以内ニ種痘シタルモノ	一	〇	一	一〇〇・〇
九箇年以内ニ種痘シタルモノ	一	〇	一	六六・六
十箇年以内ニ種痘シタルモノ	一	〇	一	六六・六
計	一八八	一二六	七二	六一・七

三、予等ノ實驗

予ガ假田防疫醫ト共ニ昭和三年五、六月ノ頃警視廳管内ニ於テ一千二百四十八名ノ多數ニ就キ實驗セル成績ハ次表ノ如クニシテ、第一期種痘善感後一箇年ヲ經過セル三歳ノ小兒ハ既ニ二五%善感シ、滿五

箇年ヲ經過セル七歳以上ノ小兒ハ八〇%内外ニ善感スルヲ見タリ。

年齢別	定期種痘後經過年數	種痘人員	善感人員	%	不善感人員	%
三歳	一	三三三	八五	二五・五三	二四八	七四・四七
四歳	二	三三八	一四二	四二・〇一	一九六	五七・九九
五歳	三	二九三	一七二	五八・七〇	一二一	四一・三〇
六歳	四	三〇五	二二三	七六・三九	七二	二三・六一
七歳	五	四六三	三七二	八〇・三五	九一	一九・六五
八歳	六	一、二一四	一、〇〇二	八二・五四	二一二	一七・四六
九歳	七	九〇二	六九四	七六・九四	二〇八	二三・〇六
十歳	一	七八	一四	一七・九五	六四	八二・〇五
十歳	二	一六五	四二	二五・四五	一二三	七四・五五
十歳	三	一六四	三三	二〇・七三	一三〇	七九・二七
十歳	四	一三九	三三	二四・四六	一〇五	七五・五四
十歳	五	一〇一	二七	二六・七三	七四	七三・二七
十歳	六	二八	三	一〇・七一	二五	八九・二九
十歳	七	二〇	六	三〇・〇〇	一四	七〇・〇〇
十歳	八	八	四	五〇・〇〇	四	五〇・〇〇
計		四、五五一	二、八六四	六二・九二	一、六八七	三七・〇〇

四、其ノ他ノ文献

以上ノ外我國ニ於ケル梅野氏、山本氏ノ成績ハ第四編第三章第一節記載ノ如シ。要之前掲諸氏ノ報告ニ依レバ、大體ニ於テ五年ヲ經過スレバ五〇乃至八〇%ガ再種痘ニ善感シ、免疫力著シク低減スルコトヲ證明スルモノナルヲ知り得タリ。



感率高シトハ從來二三諸家ノ既ニ論セル處ニシテ、大阪市立桃山病院ノ濱田氏モ小學校ニ於テ女兒一  
千九十二人中第二期第一回接種ニ際シ定型のニ發痘セルモノ二百八十三人即チ二六・四%ナルニ對シ、  
男兒ハ一千二十六人中二百二人即チ一九・六%ニシテ、女兒ハ一般ニ男兒ニ比シ種痘免疫ノ消失早キガ  
如シト報告セリ。

二、加計塚小學校ニ於ケル成績

大正十三年一月痘瘡流行ニ際シ、警視廳管内澁谷町加計塚小學校ニ於テ全校兒童ニ對シ臨時種痘ヲ行  
ヒタルガ、其ノ成績ハ別表ノ如クニシテ性別ニ依ル善感率比較ハ八歳ヨリ十六歳迄ノ各年齢中、唯十歳  
ニ於テノミ女兒ニ比シ男兒ノ方稍々高率ヲ示セルモ、其ノ他ノ年齢ニ於テハ何レモ女兒ハ善感率高シ、  
而シテ右ノ内八、九、十歳ノ大多數ノモノハ第一期種痘ヲ了シタルモノニシテ、種痘後相當ノ年限ヲ經過  
セルモ、十二歳以上ノモノハ何レモ第二期種痘ヲ受ケテ幾許モナキモノナルニ依リ、斯ノ如ク女兒ニ善  
感率多キ理由ヲ單ニ免疫力ノ早期消失トノミ考フルハ少シク輕忽ニ過グルノ嫌ナカルベキカ。

年 齡 別	男			女		
	接種者數	善感者數	善感百分率	接種者數	善感者數	善感百分率
八 歲	四八	三三	六六・六七	四九	三七	七五・五一
九 歲	八九	六四	七二・九一	九〇	七四	八二・二二
十 歲	八三	六一	七三・四九	一〇二	七一	六九・六一
十 歲	九〇	二〇	二二・二二	七八	二七	三四・六二
十 歲	九五	一七	一七・八九	九〇	二七	三〇・〇〇
十 歲	八一	一九	二三・四六	七八	三〇	三八・四六
十 歲	四二	一六	一四・二九	四一	一九	四六・三四
十 歲	一〇	二	二〇・〇〇	四	三	七五・〇〇
十 歲	四	一	二五・〇〇	四	三	七五・〇〇
計	五四二	二二二	四〇・九六	五三二	二八八	五四・一四

三、予ノ實驗

今回予ノ調査セル處ニ依ルモ大體ニ於テ其ノ成績同様ナルヲ認メタリ、即チ前表本節第六ノ三参照ノ  
如ク三歳乃至十五歳ノ各年齢中(十歳ヲ除ク)三歳、六歳、九歳、十四歳ニ於テ男性ノ方女性ヨリモ善感率稍  
高キヲ示セルモ、其ノ他ノ各年齢ニ於テハ何レモ女性ノ方善感率高ク、其ノ差ノ大ナルコトハ男性ニ於  
テ其ノ率高キ場合トハ同日ノ論ニアラズシテ、十三歳ノ如キハ二倍以上ニ及ベルノ狀ニアリ、而シテ綜  
括シタル全部ノ性別比較ハ男兒ノ五〇・七四%ニ比シ女兒ハ五九・〇〇%ヲ示シ其ノ差八・二六%ニ達ス。  
要スルニ再種痘ニ於ケル女兒ノ善感率ガ男兒ニ比シ著シク高キコトハ、各實驗者ノ成績略一致ス、之ガ原  
因ニ就テハ免疫持續期間ノ差異、善感要約ノ良否、皮膚ノ性状ノ差異、接種後ノ保護ノ適否等ヲ考ヘ得ベキ  
モ、其ノ何レヲ以テ重要視スベキヤハ遽ニ判定シ難キコトナリトス。

第四章 母體ノ罹患及種痘ト胎兒ノ免疫トノ關係

母體ノ痘瘡罹患及種痘ガ胎兒ニ及ボス影響ニ就テノ諸家ノ實驗ヲ綜覽スルニ、既ニ胎生期ニ於テ一定度  
ノ免疫ヲ獲得シ得ルモノナルハ明カナルモ、自働的免疫及他働的免疫ニ依リ其ノ意義ヲ異ニスルモノア  
リ。

(甲) 自働的免疫

自働的免疫ノ胎兒ニ現ハルルハ從來極メテ稀ナルモノト思惟セラレタルモ、太田原氏等ニヨリテ胎兒血  
行中ニモ痘毒ノ移行スルモノナルコト明カニセラレタルヲ以テ、胎兒ノ自働的免疫亦相當ニ考慮スベキ

モノナルベシ。  
 ボーリングゲル Bollinger、マルタン Martin 氏等ニ依レバ母體ガ妊娠末期ニ於テ痘瘡ニ罹患シ、爲ニ初生兒ガ痘瘡ニ罹リ若ハ痘痕ヲ有シテ出生スル場合アリ、此際ハ勿論自働免疫ヲ獲得セルモノナリト解釋スルヲ至當トスベシ、反之母體ガ痘瘡ニ罹患中若ハ其ノ恢復期ニ出生セル初生兒ハ、フグエニ Huguenin 氏等ノ統計ニ依ルモ何等痘瘡ノ症候ナキモノ迄ニ多ク、此場合ニハ初生兒ハ出生後早晚痘瘡ニ罹患スルコト尠カラズ。初生兒ノ痘瘡罹患ガ出生後十二日乃至十三日以内ニ認めラレタル場合ニハ、明カニ子宮内感染ト解釋スベキモノニシテ、夫レ以後ニ發病シタリトセバ感染ハ二次的ニ起リタルモノト云フベシ、此際初生兒ハ子宮内ニ於テハ感染ヲ免レ、免疫力ヲ有セザリシハ明カナリ、之ニ依リテ觀ルニ、胎兒ノ子宮内自働的免疫ハ必シモ發生スルモノニハアラザルベシ、又痘瘡ノ徵候ヲ有セズシテ出生シ、而モ免疫力ヲ保有スルモノニ關シテハ、子宮内ニ於テ既ニ無疹性痘瘡ヲ經過セルモノナルベシト説明ヲ試ミルモノアルモ、之レ自働的免疫ヨリハ寧ロ他働的免疫ヲ以テ説明スベキモノナルコトハ後述ノ實驗例ニヨルモ明カナルベシ。痘瘡ヲ受ケタル母體ガ其ノ胎兒ニ自働的免疫ヲ賦與スルヤ否ハ疑ハレタル所ナルモ、太田原氏ノ實驗ニ依リ痘瘡ノ胎兒血行ニ移行スルハ確實ニ證明セラレタル所ニシテ、理論上胎兒ノ痘瘡ニ對スル自働的免疫獲得ノ可能性アルコトハ明カナリ。

(乙) 他働的免疫

他働的免疫ガ母體ヨリ初生兒ニ移行シ、其ノ初生兒ヲシテ痘瘡感染ヨリ免レシメタリト考ヘラルル報告ハ尠カラズ、諸家ノ實驗ニ依レバ、痘瘡流行區域ニ於テ初生兒及幼若ナル乳兒ハ本病ニ罹患スルコト成長兒ニ比シ稀ナリトセララル、キツスカルト及ストツペンブリック Kisskaht u. Stoppenbrink 氏ハクーニヒスベル

ヒニ於テ蒐集セル材料ニ依リ、痘瘡施行以前ニ於ケル痘瘡患者ノ年齢別、死亡率ヲ見ルニ、生後一乃至六箇月ハ死亡率比較的少ク、一箇月ノ乳兒ハ最少死亡率ヲ示シ、二箇月及三箇月兒ニ於テ稍、増加シ、七乃至十二箇月兒ノ死亡率ハ一乃至六箇月兒ノ死亡率ノ二乃至三倍ヲ示シ、生後二歳ノモノニ於テハ死亡率最モ大ナリトノ結論ヲ得タリ、ゾーベルンハイム Sobernheim、ヤーリング Beling 氏等モ幼少時母體ヨリ得タル免疫ニ依リ一定度迄ハ感染ヲ免ルル場合アルモ、其ノ免疫ハ持続性ニアラズト述ベ、モラウエツツ Morawetz、ボーン Bohn 氏等モ亦同様ノ見解ヲ有ス、殊ニボーン氏ハモスクワ育兒院ニ於テ二八、九五〇人ノ孤兒ニ痘瘡ヲ行ヒ、反復痘瘡ノ後尙陰性ナリシモノ七〇九人(二四四%)アリシ事實ヲ報告セリ、我國ニ於テ天兒氏ノ報告ニ依レバ、初生兒ハ母體ヨリ多少共免疫ヲ獲得シ居ルモノノ如ク、而モ其ノ消失ハ急速ニシテ生後二乃至三月ニ於テハ既ニ罹患シ得ルモノナリト云フ、同様ノ事實ハウルツ Wurtz 氏モ亦夙ニ確認セル所ナリ、母體ガ痘瘡ヲ受ケタル後、其ノ免疫ガ胎兒又ハ初生兒ニ移行シ得ルヤ否ニ關スル觀察亦尠シトセズ、道種ノ實驗ニシテ最初ニ之ヲ行ヘルモノハ、リツケルト Ricker 氏ヲ以テ嚙矢トナス、氏ハ羊ヲ用ヒテ實驗ヲ企圖シ、受胎セル母獸約七百頭ヲ得テ、分娩前六時間以内ニ羊痘ヲ接種セリ、而シテ是等ノ仔獸ハ生後四乃至六週ニシテ羊痘瘡ヲ注射セシニ、對照動物ニ於テハ九日ヲ經テ發痘ヲ示セシニ拘ラス、是等ノ仔獸ハ總テ無反應ニ終レリ、其ノ後第二回及第三回接種ヲ行ヒ、凡テ陰性ニ經過セシモノ、三歳ニ達スルニ及ビテ上記ノ對照動物ハ何レモ不感ナリシニ反シ、總テ善感スルヲ見タリ、此實驗ニ於テ興味アルハ子宮内ニテ被働的免疫ヲ得タル動物ハ、痘瘡ヲ反復スルモ何等持續性ノ自働的免疫ヲ獲得シ得ザリシコトニシテ、前述ノ實驗ニ於ケル仔羊ノ不感受性ハ他働的免疫ニ因リシモノナルコトヲ示スモノナリ、ロロツフ Roloff 氏亦種痘ヲ受ケタル母體ヨリ生レタル仔牛ガ、畜群間ニ流行セル羊痘ノ感染ヲ免レタルヲ實驗シ、ヂエクレール Duedert 氏ハ自然感染ヲ經過セル母獸ヨリ生レタル仔羊ガ、生後短期間ニ亘リテ羊痘接種ニ對シ不感受性



ヲ保有スルヲ認メタリ、人體ニ於テハアンダーヒル Underhill、ブルグハルト Burkhardt 氏等ノ實驗アリ、殊ニ後者ハ妊娠八九月ニ當リ再種痘ヲ施セル八人ノ母體ヨリ生レタル八兒ニ、生後四乃至六日目ニ接種ヲ行ヒシニ、此中善感セルモノハ一名ノミナリシガ、種痘ヲ施サザリシ母體ヨリ生レタル四人ノ胎兒ハ悉ク善感セリ、又氏ハ皮下ニ大量ノ痘苗ヲ注射セル二婦人ノ初生兒モ種痘不善感ナリシヲ見タリト云フ、其ノ後ニ於ケルザガリー Zagari、ヨエリー Pery、カミエー Camius、パルム Palm、メンシング Mensching、ウイツケンザック Wickensack、キルスタイン Kirshen 氏等ノ實驗モ亦其ノ結果ハ之ニ一致ス、是等ノ報告ニ反對ノ成績ヲ舉ゲタル學者ハ其ノ數少ク、僅ニガスト Gast、ベーム Behm、及ウオルフ Wolf 氏等アルノミ。

要スルニ、初生兒及幼兒ハ母體ヨリ一定度迄免疫ヲ受クルモノト考フルヲ穩當トスベシ、滅殺素ニ依ル實驗ニ於テモ、ベクレール、シャンボン、メナール、及クローン Beclere, Chambon, Menard u. Coulomb、ゲルトレル Görtler 氏等ノ成績ニ依レバ、再種痘ヲ受ケタル母ヨリ生レタル初生兒ハ其ノ血液中ニ滅殺素ヲ證明シ得ト云フ、然レドモベクレール氏等ハ初生兒ノ滅殺素ハ其ノ消滅急速ニシテ、初生兒ノ先天免疫保有期間ハ極メテ短期ナルベキヲ認メタリ。

佐藤氏ノ實驗セル處ニ依レバ、高度ノ滅殺素ヲ示セル家兔ノ二仔ハ、生後四週ニ於テ皮膚及角膜感染ニ對シ免疫性ヲ示セルノミナラズ、其ノ血清亦明カニ滅殺素ヲ有セリト。

免疫抗體ガ母乳ヲ通ジテ乳兒ニ移行スルヤ否ニ就テハ、ルブレール Lereboullet、サーズフィールド Thurstfield、ルビーロー Loubie 氏等ノ觀察アリ、何レモ抗體ノ移行ヲ認ムルモノノ如シ、殊ニルビーロー氏ハ牝牛ノ乳房ニ接種セルモノノ乳汁三〇〇乃至六〇〇莖ヲ與ヘテ後、一箇月ヲ經テ種痘ヲ行ヒ不善感ナリシヲ報告シタリ、然レドモヤンソン Janson 氏ノ觀察ニ依レバ、種痘ヲ施セル乳母ニアリテハ其ノ抗體ノ乳兒ニ移行スル事實ヲ認メズト云ヘリ。

### 第五章 種痘ニ依ル「アレルギー」反應

痘瘡ヲ耐過セル者或ハ既種痘者ニ種痘スルトキハ、其ノ皮膚局部ニ創傷反應及ビ場合ニ依リテハ之ニ加フルニ即時反應現ハレ、次イデ一種ノ皮膚反應即チ紅暈丘疹形成又ハ腫脹、浸潤及搔痒感ノ起ルヲ見ル、而シテ此反應ノ出現ハ初種痘者ニ於ケルガ如ク一定ノ潜伏期(二乃至三日)ヲ要スルコトナク、多クノ場合接種後二十四時間内外ニシテ最高ニ達シ、種痘ガ善感ニ至ル場合ニ在リテハ漸次増強シテ丘疹乃至膿疱形成ニ移行シ、不善感ニ終ル場合ニ在リテハ次第ニ減退シ、其ノ大多數ハ接種後四乃至六日ニシテ消失スルモノナリ。

種痘後ニ現ハルルル如キ皮膚反應ニ就テ、始メテ學術的記載ヲ爲セルハ、ピルケー、Pirquet 氏ニシテ、一九〇六年及一九一一年、數回ニ亘リ之ヲ細密ニ觀察シ報告セリ、氏ハ此反應ヲ促進反應又ハ早期反應或ハ「アレルギー」反應ト稱セリ、ピルケー氏ハ種痘後ニ於ケル局所反應ヲ先ヅ左ノ四型ニ分テリ。

- A. 創傷反應  
「ランチエツト」ニテ皮膚ヲ損傷スルコトニ依リ起ル反應ニシテ、痘苗ヲ塗布スルト否トニ拘ラズ、總テノ場合ニ損傷周圍ニ起ル潮紅ナリ、而シテ施術後直ニ起リ二十五時間乃至四十二時間ニシテ消失ス。
- B. 初種痘反應  
創傷反應消失後、一定ノ潜伏期ヲ經テ第四日目ヨリ發生シ、丘疹、紅暈、膿疱形成ノ經過ヲ取ルモノ。
- C. 早期紅暈反應  
創傷反應ニ引續キ起ル紅暈反應ニシテ、扁平ナル丘疹形成ヲ爲スモノ、而シテ第四日目ヨリ漸次消退ス。
- D. 早期丘疹反應

C. 下同様ナル經過ヲ取ルモ丘疹ノ形成著明ナルモノ。  
ビルケイ氏ハ其ノ後更ニ之ヲ下ノ如ク細別セリ。

(1) 完全ナル丘疹形成ヲ伴フ促進アレア反應

丘疹形成、灰黄色痘臍アル膿疱形成等、第一回種痘ト殆ド同様ナル經過ヲトル、只之下異ナル點ハ反應ノ促進スルノミ。

(2) 丘疹形成ナキ促進アレア反應

桑實様腫脹或ハ平等ナル暗赤色ニ蔽ハレテ丘疹判明ナラズ、退行期ニ至リ壞死性ノ痂皮(定型的)丘疹ニ由ルモノト同様ヲ生ズルモノ。

(3) 遲鈍性丘疹形成

發育緩慢ニシテ三乃至四日後其ノ極ニ達スルモ左程大ナル形成ヲ爲サズ、丘疹ハ之ヨリ紅暈ヲ生ズルコトナク退行シ始ム。

(4) 早期反應

特ニ顯著ナル鑑別點ナク、只早期丘疹發現スルニ過ギズシテ、四十八時間後ヨリ既ニ消退シ始ム、感受性高キモノハ水疱形成ヲ招來スルコトアリ。

(5) 丘疹形成ナキ促進反應ヲ招來スル早期反應

早期反應ヲ呈セル部位ハ後ニ至リ紅暈反應ヲ招來スルコトアリ、即チ重複反應ナリ。

(6) 「ゲロイド」形成

此反應ハ量質、時間的ニモ「アルレルギー」反應ニ合致セザルモ、痘苗ニ對スル反應ト認メザルベカラズト爲シ、即チ六日目ニ弱キ丘疹現ハレ九日目ニ定型的ノ紅色ヲ呈シ、二十日ニテ丘疹ノ周圍ニ「アレア」現ハ

レ、爾後消退スルモノナリ。

(7) 陰性反應

創傷反應ノ強サト同様ニ經過ス、陰性反應ハ見ヘザルニアラズシテ、創傷反應ヨリ亦ナシガ爲メ見ルコト能ハザルナリ。

而シテ「アルレルギー」反應ノ本體ニ關シテビルケイ氏ハ死滅痘苗ヲ用キ、又ハ稀釋牛痘苗ヲ用キ、或ハ人化痘苗ヲ使用スル等種々ナル研究ニ依リ。

一、種痘性早期反應ハ牛痘苗ト夫レニヨリ免疫サレタル(即チ過敏性トナレル)個體トノ間ニ起ル特異ノ反應ナリ、本反應ハ雜菌混在又ハ牛蛋白ニ依ルモノニアラズシテ、痘毒ニ依ル特異性反應ナルコトハ新鮮人痘漿ヲ以テスルモ喚起シ得ルヲ以テ明カナリ。

二、早期反應ハ痘毒ト量的ニ關係ヲ有シ、使用痘毒ノ量ハ初種痘ニアリテハ其ノ反應ニハ無關係ナリ。要スルニ早期反應ハ痘原體ト過敏性個體內ニ存スル抗體トノ結合ニ依リテ起ルモノナリ。

三、被接種者ノ血清中ニハ牛痘苗ニ對スル沈降素ヲ含有セズ。  
ト結論セリ、爾來本問題ニ關シテハ諸家ニヨリテ攻究セラレ、種痘免疫上ニ貢獻セル點多ク、又防疫上實際的ニ應用セラレ、既ニ米國ニアリテハフォース、Fore氏ノ提唱ニ基キ、海港檢疫ニ應用シテ相當ノ效果ヲ收メツツアリト、我國ニ於テハ種痘過敏反應或ハ種痘異常反應ト稱セラレ、巽ニ板澤氏、城井、谷口、兩氏、重田氏、並鈴木、四宮、岩瀬諸氏ノ業績發表アリ、種痘免疫ト「アルレルギー」反應トノ關係或ハ其ノ防疫上ニ於ケル價値批判及本反應ヲ惹起セシメ得ベキ本體即チ「アルレルギー」ニ關スル實驗的檢索ニ依リ、「アルレルギー」反應ニ關スル事項ハ今ヤ殆ド闡明セラレタルガ如シト雖、尙多少ノ補足スベキ點アルヲ信ジ、予等ハ次ノ如キ實驗ヲ爲シ之ヲ追究スルコトトセリ。

### 一、調査事項

調査セル事項ハ大略左ノ如シ。

一、アルレルギー反應ノ型及其ノ經過。

(1) 即時反應ニ關スル觀察。

(2) アルレルギー反應出現ノ時期。

(3) アルレルギー反應ノ症候及型。

(4) アルレルギー反應ノ症候別經過。

(5) 生死兩苗別ニ觀タルアルレルギー反應ノ消長。

(6) 痘苗殺滅溫度ニ依ルアルレルギー反應ノ比較。

二、アルレルギー反應ト種痘成績トノ關係。

三、種痘後經過年數トノ關係。

四、接種部位竝ニ痘痕數トノ關係。

五、アルレルギー反應ニ關スル實驗。

### 二、實驗方法

昭和三年八月ヨリ同四年三月ニ亘リ、東京看護婦學校ニ於テ交互ニ入學セル生徒七百名内外ニ就キ、前後四回ニ亘リ再種痘ヲ行ヒ、上記ノ如キ觀察ヲ爲シタリ、即チ第一回實驗ハ接種後二十四時間ニ、第二回實驗ハ二十四時間後、四十八時間後及七十二時間後ノ三回、第三回及第四回實驗ハ第八日目迄連續檢診セリ。痘苗ハ主トシテ傳染病研究所製品(一部北里研究所製品)ニシテ包裝後直ニ之ヲ使用セリ(夏季ニアリテハ

慶法瓶内ニ氷塊ト共ニ貯ヘタリ)第三回實驗ニ際シテハ、攝氏六十度三十分加熱苗第四回實驗ニ當リテハ八十度三十分、百度三十分加熱痘苗ヲ用キ、何レモ普通痘苗ト半數ヅツ接種セリ。

接種方法ハ「種痘施術心得」ニ準據シ、局所ハ普通「アルコール」ヲ以テ嚴重ニ消毒シ、ラシチエツトヲ用キ、主トシテ左上膊第四回實驗ハ生死兩苗別ニ右及左上膊ヲ選ベリニ十字式六個ヲ切種シ、繃帶ハ之ヲ禁ゼリ。

種痘善感或ハ不善感ノ成績ハ「種痘施術心得」ニ據リ、東京市衛生課編纂第二期種痘標準圖譜ヲ參考トシ、善感トハ第八日目ニ於テ一類以上ノ浸潤ヲ伴フ丘疹乃至痘疱ヲ形成スルモノヲ云ヒ、不善感トハ極メテ輕度ノ丘疹、單純ナル硬結乃至切創ノ結痂セルモノ及全ク反應ナキモノヲ指セリ。

### 三、實驗成績ノ綜括及「アルレルギー」反應ニ對スル批判

#### 一、「アルレルギー」反應ノ型及其ノ經過

##### (1) 即時反應

人體ニ痘苗ヲ接種スルトキハ、其ノ未種痘者タルト再種痘者タルトヲ問ハズ、既ニ十分間ヲ出デズシテ其ノ外傷ノ度ニ應ジ、輕度ノ隆起及潮紅即チ創傷反應ヲ來スモ漸次消退シ、二十五時間乃至四十二時間後、他ノ細菌ノ感染ナキ場合ニハ完全ニ消失スルニ至ル(ビルケ―氏)場合ニ依リテハ創傷反應ニ加フルニ隆起即チQuadda著明ナルコトアリ、此反應ヲ予等ハ種痘ニ依ル即時反應ト稱セントス、即チ其ノ輕度ナルハ皮膚切線ニ沿ヒ僅ニ隆起シ、其ノ周圍發赤スルアリ、或ハ單ニ浮腫狀隆起ノミニシテ殆ド發赤ヲ呈セザルアリ、場合ニ依リ多少ノ動搖アルモ接種人員ノ二〇乃至二〇%ニ如斯反應ノ出現スルヲ見タリ、其ノ強度ナルモノハ全人員ノ約二%ニ認メ、隆起部即チQuadda著明ニシテ恰モ蜂ニ刺螫サレタルガ如ク、又蕁麻疹樣觀ヲ呈シ、直徑一乃至二種ニ達シ、其ノ境界判然タリ、形狀モ亦種々ニ

シテ圓形或ハ星狀又ハ紡錘狀多クノ場合横徑ニ擴ガル傾向アリ或ハ葉狀ニ隆起スル等多様ナリ而シテ其ノ周圍ハ暈狀ニ發赤シ其ノ程度ハ種々ナリ場合ニ依リテハ搔痒感及疼痛ヲ伴フコトアリ種痘ニ依ル即時反應ニ關シテハ之ヲ文献ニ徵スルモ未ダ精細ナル報告ナシ。

實驗成績	檢診人員	即時反應者明ナリシ者	檢診人員ニ對スル同上百分比
第一回	三二九	八	二・四三
第二回	一七四	三	一・七二
第三回	一四四	四	三・五〇
第四回	一一六	三	二・五九
計	七六三	一八	二・三六

本反應ヲ以テ種痘ニ依ル所謂「アルレルギー」反應中ニ綜括スベキモノナルヤ或ハ之ヲ別個ノ反應トシテ見ルベキモノナルヤ其ノ原因果シテ何レニアリヤ等ハ興味アル問題ナリト思惟スルモ未ダ之ガ研究アルヲ聞カズ予等ノ實驗セル所ニ依レバ本反應ノ有無及強弱ト所謂「アルレルギー」反應ノ強度竝ニ常該接種ノ成績善感或ハ不善感トノ間ニハ何等直接ノ因果的關係ナク痘苗ノ種類純牛痘及牛化人痘苗竝ニ生活痘毒ト死滅痘毒トノ間ニ差異ヲ見ズ且牛肉汁或ハ馬血清ニ依リテハ殆ド本反應ヲ惹起セシメ得ザルモ痘苗ヲ用フレバ反復接種スルモ每常著明ニ出現スル等單ニ異種蛋白ノミヲ以テシテハ每常起ル反應ニアラザルコト明白ニシテ恐ラクハ痘苗ニ對スル被接種者ノ特異體質ニ由來スル異常反應ト看做スベキモノナラント思料スルモ初種痘者ニ殆ド之ヲ見ルコトナキヲ考慮セバ又種痘免疫ト全ク無關係ナル反應ニアラザルヲ思ハシム。

(2)「アルレルギー」反應出現ノ時期

痘瘡ヲ經過セル者或ハ既種痘者ニ種痘スルトキハ創傷反應又ハ即時反應出現後引續キ局所ニ發赤(Area)及丘疹(Papels)ヲ生ジ多クハ之ニ伴フニ浸潤腫脹竝ニ搔痒感ヲ以テシ所謂「アルレルギー」反應ヲ呈ス此反應ハ通常二十四時間内外ニシテ其ノ極ニ達シ爾後漸次消退スルモノナリ然レドモ「アルレルギー」反應出現ノ時期ニ就テハ既ニビルゲイ氏ガ觀察セシ如ク大體ハ反應ガ促進(Deschleunigen)シテ發現スルモノニシテ殆ド免疫性ナキ初種痘者ニ見ルガ加キ一定ノ潜伏期ヲ要スルコトナキモ而モ必シモ每常前記ノ如キ經過ヲ取ルモノニアラズシテ其ノ狀態ハ被接種者ノ有スル免疫性竝ニ個體ニ依リ多様ニシテ一定セズ既ニ述べタルガ如クビルゲイ氏ハ第六日目ヨリ反應ノ出現セル例ヲ記載セリ予等ハ次表ニ示スガ如ク(イ)二十四時間以内ヨリ起リタルモノ(ロ)四十八時間以内ニ起リタルモノ(ハ)七十二時間以内ニ現ハレルモノノ三型ニ之ヲ區別スルヲ得タリ。

生活痘苗ニテ觀タル場合

「アルレルギー」反應陽性者二五一名中	二十四時間以内ニ起リシモノ	種痘善感セシモノ	二二名 (八・七七%)
二十四時間以上	一六名	不善感ナリシモノ	二〇六名 (八二・〇七%)
四十八時間以内ニ起リシモノ	七名	善感セシモノ	九名 (三・五九%)
四十八時間以上	七名	不善感ナリシモノ	七名 (二・七九%)
七十二時間以内ニ起リシモノ	七名	善感セシモノ	六名 (二・三九%)
七十二時間以上	七名	不善感ナリシモノ	一名 (〇・四〇%)

死滅痘苗ニテ觀タル場合

二十四時間以内ニ現ハレルモノ	一三三名 (九四・八二%)
二十四時間以上	一〇名 (三・九八%)
四十八時間以内ニ出現セルモノ	三名 (二・二〇%)
四十八時間以上	三名 (二・二〇%)
七十二時間以内ニ出現セルモノ	三名 (二・二〇%)
七十二時間以上	三名 (二・二〇%)